

# ジョン・カラピント<sup>1)</sup> (著) 『通訳者：普遍文法への挑戦』 (下)<sup>2)</sup>

三宅正隆 (訳・注)

## Abstract

Hauser, Chomsky, and Fitch claimed in their influential and controversial 2002 paper that the uniquely human, language-specific faculty in narrow sense consists only of recursion, and that recursion cannot be considered as an adaptation to communication. Contrary to their claim, D. Everett argues that Pirahã lacks this fundamental characteristic of human language, contending that recursion is a tool made available by the brain, and that it need not be used. This is an annotated translation of an inspiring report by John Colapinto, a staff writer at *The New Yorker* magazine, about Tecumseh Fitch's visit to the Pirahã tribe in the rain forest of Brazil. With Everett as his guide, Fitch conducted linguistic experiments to ascertain Everett's claims. The author writes about Everett's wife, also one of a few foreign speakers of the language, as well. The couple's contrasting views regarding the language help reveal some of the exotic and unique characteristics underlying the Pirahã language and culture.

In the postscript, I will touch on some of the recent discussions regarding the term "recursion," with special attention to the "controversy" about the Pirahã language.

## 注釈者序文

Marc D. Hauser, Noam Chomsky, W. Tecumseh Fitch が 2002 年に *Science* に発表した論文 "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?" は生得的言語能力としての普遍文法研究に進化論的議論を再度吹き込むといういわゆる「生物言語学」の新たなステップを開いた点で画期的な論文である。しかしながら一般にはヒトの生得的言語能力を「再帰性」(recursion) のみに限定したように受けとられ又、この特性はコミュニケーションという機能のための進化論的適用の結果ではあり得ないという極端な仮説故すぐに論争の火種ともなった。例えば、S. Pinker & R. Jackendoff は "The Faculty of Language: What's Special about It?" と題して Hauser 等の論文を細分にわたって検討、批判を展開した。やや時を置いて再度 Chomsky らの反論が発表され (Fitch, Hauser, & Chomsky, 2005) またそれに答える Jackendoff & Pinker (2005) の論文が出るなど、その後も活発に議論が続いている。しかしながら普遍文法 (UG) の考え方や進化論的解釈においては異なるものの Pinker や Jackendoff の立場はヒトには生得的言語能力があるという主張自体では Chomsky 等の立場と共通している。一方ある時点までは Chomsky 理論の擁護者であった Dan Everett が 2005 年に *Current Anthropology* 誌に発表したピーダハン語

についての論文は Chomsky や Pinker などが擁護する普遍文法の必要性自体に疑問を投げかけるもので、Pinker の言葉として以下の翻訳にも紹介されているようにこの説は「パーティーに投げ込まれた爆弾」と受け取られるようになり、その後言語学はもちろん人類学や認知論等の分野でこの Everett のピーダハン語についての議論が活発になっている。

この翻訳の原文は *New Yorker* の記者 John Colapinto による、先にあげた論文の著者の一人である Tecumseh Fitch が Everett の論文内容を自ら確かめたいとアマゾンに出かけた時のレポートであるが、フィールドワークについての興味深い報告と合わせて Everett, Chomsky を始めとする著名な言語学者との様々な出会いややり取りが随所に織り込まれていて、この点でも興味深いレポートとなっている。

あとがきでこの再帰性に関する最近の論争についてピーダハン語とのかかわりで簡単にふれる。

**Keywords :** ピーダハン語, 普遍文法, 再帰性 (リカーション), 言語相対性, 直接経験の原理

(以上の本文, 前号掲載)

1998 年, ちょうどピッツバーグ大学の言語学部で 9 年間学科長をつとめた直後のことであるが, エヴェレットは人文科学学部の新しい学部長との争議に巻き込まれた。当時妻のケレンは同じ大学で言語学の修士課程の修了間際であったが, それまで彼女はエヴェレットの学部で教育助手として働いていて給料を受け取っていた。それに関してエヴェレットは, ケレンに合計で約 2,000 ドルの不適切な支払いがあったのではないかという嫌疑をかけられ, 彼は徹底的な監査を受けた。監査後彼の容疑は晴れたが彼は不当行為との申し立てで心理的に傷を負った。ケレンは大学での仕事を辞め, もう一度二人でジャングルに戻ってピーダハンの中で宣教師として働こうと熱心に彼を説得し続けた。

エヴェレットが本気で宣教師の仕事に打ち込んでいた頃からすでに 10 年以上が経っていた(これはまさに彼の宗教的な信仰心の薄れの反映に他ならなかったわけだが)。「多くの著作を読んだり, 哲学に傾倒したり, クリスマン以外の多くの友達に会うようになるにつれて, だんだん超自然的な世界で信仰構造を維持するのが難しくなってきたんだ」と彼は言った。しかしエヴェレットは結局アマゾンに帰ることを選択した。というのも一方では自分の信仰の火を再び燃やしたいとの思いもあったし, 他方では 20 年にわたって彼の知的生活の基盤となってきた理論に幻滅したせいでもあった。「私はチョムスキーの世界観をこれ以上買いかぶることができなかったし, 学究生活は一生を捧げるには空虚で, とるにたらない気がし始めたんだ」とエヴェレットは私に言った。

1999 年の秋にエヴェレットは仕事をやめ, あらかじめボートで運んでおいた 14 トンもの硬質の材木を使ってマイシ川の岸辺に二部屋つきで 8 メートル四方の家をケレンと一緒に建てた。この新しい家は虫や蛇が入らないようにもしていたし, ガスストーブや発電機で動く冷蔵庫, 水の濾過装置, テレビ, DVD プレーヤーも備え付けた。「ピーダハンと同じように 20 年暮らしてみても, 不自由な暮らしはもうたくさんだと思うようになったよ」と彼は言った。彼は宣教師の仕事に身を投じ, ルカ伝をピーダハン語に翻訳したり, ピーダハンの人たちにそれを読聞か

せたりした。しかし、この熱意もすぐに消え失せてしまった。エヴェレットはピーダハンが聖書に全く宗教的意味を置かない理由が次第に飲み込めるようになると、次第に彼自身も超自然的なものを信じられない点で彼らと全く同類であると思い始めて、ついにはこのことを公言してしまった。彼は自身が無神論者であることを宣言し、宗教活動から身を引き、家のこまごまとした仕事や言語学の研究をして時間を過ごした。

2000年に村から200マイルほど離れたポルトベリヨへ旅行した折に、エヴェレットはマンチェスター大学の同僚からその1月前に届いていた電子メールを見つけた。メールは客員研究員専任教授として1年間大学に招きたいというものであった。2002年にエヴェレットは同大学で専任教授としての職を得、ケレンとともにイギリスへ移った。しかしその3年後、結局彼とケレンは破局をむかえ、彼女はブラジルに帰ってしまった。その後彼女はピーダハン村とポルトベリヨのアパートで半年ずつ過ごすことにした。一方、彼は2006年の秋にアメリカに帰国し、イリノイ州で新しい仕事に就いた。エヴェレットは今思い返してもジャングルで過ごしたこの3年間は決して無駄な時間ではなかったと言っている。「このピーダハンとの新しい門出で実のところ本当に開放された気分になった。チョムスキー理論の制約から解放され、文法と文化との新たな関係について考えることができるようになったんだ」と私に語った。

エヴェレットが幾分苛立たしく思ったことがある。それは、多くの注目を引いたピーダハン語についての最初の論文がエヴェレット自身の書いたものではなく、彼の友人（ピッツバーグ大学でのかつての同僚）で現在コロンビア大学で教鞭をとるピーター・ゴードン（Peter Gordon）によるものだったからである。ピーター・ゴードンは2004年 *Science* にピーダハンの数の理解に関する論文を発表していた<sup>29)</sup>。ゴードンは90年代の初めにエヴェレットと一緒にピーダハン村を訪れたことがあり、その後でエヴェレットは彼にピーダハンの「1-2-たくさん」(one-two-many) という限定的な数え体系について話しをしていた。オーストラリア、南洋諸島、アフリカ、そしてアマゾンの他の先住民も同じような「1-2-たくさん」という数え体系を持っているがピーダハンと比べると重要な違いが1つある。それは、彼らは違う言語を使えば数の数え方を学習できるという点である。ピーダハンではエヴェレット夫妻が一生懸命になってポルトガル語で10までの数え方を教えてきたが、一度も数えられるようにはなかった<sup>30)</sup>。

ゴードンは1992年に2ヶ月間ピーダハンと過ごして、村人にいくつかの実験を行った。ひとつの実験では、彼がピーダハンの被験者の向かいに座り、自分の前に木の実やダブルA電池などの小物を1列に並べてみせ、ピーダハンにこれと同じになるように小物を並べさせるというものであった。列に2つか3つの小物が置いてある場合にはピーダハンは正確にこれをやったのけたが、それ以上の数の物が置いてあると、後にゴードンが論文に書いているように「きわめて下手であった」。ゴードンはまたピーダハンの被験者に木の実をいくつか見せてそれを缶の中に入れ、その後で一度に1個ずつ木の実を取り出す実験をした。彼は1個の実を取り出すごとに被験者に缶にはまだ木の実が残っているかどうかを尋ねた。3個以下の数の時しかピーダハンは正しく答えることができなかった。こういった実験や又これとは別に実施した実験などから、ゴードンは最終的にエヴェレットの仮説が正しいことを認めた。つまり、ピーダハンの人々

は3より大きい数のこととなると与えられた課題を正しくおこなうことができないのである。これは集団知能遅延によるのだという説明もできたが、ゴードンはこの説明を採らなかった。それは、ピーダハンが部族外との結婚は許さないものの、女性には他の部族の男性との性的交渉を認めていて、このおかげで長い間自分たちの遺伝子供給源が絶えず新鮮に保てる様にしてきたことがあったからである。ゴードンは「実は他にも根拠があって、例えば、アパラチア地方の人々に特有な近親交配の影響のようなものや精神遅滞の影響が実際に現れているなら、髪の毛の生え際や顔立ち、身体の動き方でそうだとわかるはずで、それとはっきり外見に出るはずなんだ。しかしピーダハンにはこのような兆候はまったく見られなかったからね」と言った。

ゴードンは、ピーダハンがサビアの生徒であるベンジャミン・リー・ウォーフ (Benjamin Lee Whorf) が前世紀の初めに展開し、論争を呼んだあの仮説を支持する証拠になるのではないかという思いを抱いていた。ウォーフの仮説とは、我々が語彙の中に持っている単語は我々がどのように思考するのかを決定するというものである。ピーダハンには3以上の数を表す語がないので、3以上の数で何かをする能力に制約があるのだと、ゴードンは書いている。「言語が思考に影響を与える例だ」ともゴードンは私に言った。彼の論文「単語をもたない数の認識：アマゾニアからの証拠」<sup>31)</sup> という論文は世界中の「新ウォーフ派」言語学者達に熱狂的に迎えられることになった。

エヴェレットはこの熱狂の輪の中にはいなかった。エヴェレットがこの種族にゴードンを紹介してから10年が経つが、その間にエヴェレットは、ピーダハンが絶対的な数を表す語を持たないと確信するようになった。彼が長年この言語で「1」を表すと思っていた語（下降音調で発音する *hoi*）をピーダハンがもっと相対的な「小さ目、少数」を指すのに使い、「2」を表すと思っていた語はしばしば「多少大きめ、少し多い量」の意味で使われることを知ったからである。エヴェレットによれば、初期に陥っていた誤解と混乱はいわゆる翻訳誤謬として知られているもので、要はある言語の単語と別の言語の単語がたまたま同じような状況で使われることがあると、それだけでその異なる2つの言語の単語が完全に対応すると思い込んでいたのである。ゴードンも彼の論文で「1」と「2」を表す語彙の境界に揺れがあることを指摘していたが、エヴェレットの見解では、ゴードンはこの現象の重要性を十分突き詰めていなかったことになる。（ゴードンはこの指摘に承服できず、短期間であったが二人は互いに口もきかなかった。）

ゴードンの論文が発表されてまもなく、エヴェレットはゴードンの見解で誤りだと思われる箇所を修正しようと論文の準備にとりかかった。しかし、ピーダハンに数詞がないのはつきつめればもっと大きく深い「断絶」の中のごく一端ではないかと思い始めるようになって、論文が膨れ上がった。3週間かけてエヴェレットは後に *Current Anthropology* に掲載されることになる論文を書き上げた。これは25,000語にもものばる論文で、それまで彼を苦しめてきた多くの不可解な現象に対してもそれまでにない新しい解釈、説明を加えたものになった。この中でエヴェレットはサビアの文化論から言語を考察するというアプローチにヒントを得て、ピーダハンが「今ここに生きる」という文化的規範が極度に強くて、生活のあらゆる側面にまでこの影響を受けている、と結論付けた。ピーダハンが五感によって経験できるものだけが実在するという認識の仕方に支配されていて、抽象概念によって考えたり話をしたりすることができない<sup>32)</sup>。それで色彩の語彙や数量詞、数詞、神話を持たないわけである。エヴェレットは、ピーダハンが直

接経験できる範囲内に存在するものだけを頼りに、いかに現実を認識しているのかを知る手がかりがイビピーオ (*xibipíio*)<sup>33)</sup> というピーダハン語にあることを指摘している。ここでいう直接経験とはエヴェレットの定義によると、実際に見たり聞いたりできるもの、あるいは今生きている他の人がそれまでに聞いたり見たりしたことのあるものすべて、ということになる。例えば「誰かが川の湾曲部にそって歩き去ると、ピーダハンは単にその人が去って見えなくなってしまったとは言わないで、イビピーオ、つまり「経験から消えた」と言う表現を使う<sup>34)</sup>。彼らはローソクの炎が明滅する時にも同様の表現を用いる。ローソクの光が視覚経験の枠に「出現したり消失したりする」と言うのだ。

エヴェレットは自ら「直接経験の原理」と呼ぶピーダハンの経験的現実だけに専念する生き方から、何故ピーダハンがキリスト教の受け入れに拒否反応を示すのか合点がいった。と言うのもピーダハンがキリストについての説話をするといつも「お前は彼に会ったことがあるのか」と聞くからである。キリストは2000年前に死んだのだと聞けば、以前私が殺虫剤を使った時彼らがとった行動と同様に反応をするだろう。これで彼らは何故食料の貯蔵をしないのかの説明がつく。貯蔵のためには現在まだ存在しない未来のための計画が必要になるからだ。また少年の模型飛行機作りが彫刻という伝統を定着させることにならない理由も説明できる。つまり模型は実物の飛行機を目にした時に沸き起こる瞬時の興奮を表現したものにすぎないからだ。またこれでピーダハンには、彼らがどのようにしてこの世に存在する様になったのかという創世の神話が何故ないのかも説明できる。つまり神話は親やその親の経験外にある、過ぎ去った時間の中に葬られた不可解な物語であるからだ<sup>35)</sup>。

エヴェレットはピーダハンの直接経験の原理はこれだけに留まらず、彼の言葉を借りるなら「その触手を自らの中核となる文法まで深く」伸ばして、チョムスキーがすべての言語に共通して存在すると考えるあの特徴、つまり再帰性にまで届いていると考えるに至った。チョムスキーをはじめ他の専門家達は、非常に単純な文に対してでさえ、それがどのようにして生成されているのかを説明するのにこの用語を用いる。例えば、“The girl jumped on the bed”という英語の文は名詞句 (“the girl”), 動詞 (句) (“jumped”), それに前置詞句 (“on the bed”) の階層構造からできている。又、理論上はチョムスキーが強調してきたように、言語のある部分を別の部分に繰り返し挿入し続けることで果てしなく長く続く文を作ることができる (“The man who is wearing a top hat that is slightly crushed around the brim although still perfectly elegant is walking down the street that was recently resurfaced by a crew of construction workers who tended to take coffee breaks that were a little too long while eating a hot dog that was . . .”) (まだ実に上品だけど少しつばのまわりが押しつぶれている山高帽をかぶった男が . . . なホットドッグを食べる間に少し長過ぎるコーヒブレイクをとりがちの道路工事の作業員によって最近舗装し直された通りを歩いていた<sup>36)</sup>)。または無限に続く文も作ろうと思えば可能である。1つの思考内容を他の思考内容に埋め込むことで、限りなく長い意味を生成することができる能力はチョムスキー理論の要で、チョムスキーはこの特徴を19世紀初期のドイツの言語学者ウイヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt) にならって「有限手段の無限使用」と呼ぶ<sup>37)</sup>。

しかしながらエヴェレットによれば、ピーダハンはある句を別の句の中に埋め込む再帰性を使わない。その代わり彼らは思考内容を別々の独立した単位で述べる。ピーダハンが彼らの言



葉で「私は川岸にいた犬が蛇に噛まれるのを見た」と言うのかどうかエヴェレットに尋ねてみると、「言わないね。彼らなら『私は犬を見た。犬は川岸にいた。蛇が犬を噛んだ』と言わなくてはいけないんだ」と答えた。エヴェレットの説明によれば、ピーダハンは目に見えることだけを現実として受け入れるので、彼らの話は直接的な断言文（例えば「犬が岸辺にいた」）だけで構成されるのだ。そして、埋め込まれた節（例えば、「川岸にいた...」）は断言するのではなく証拠だてたり、数量を表現したり、限定したりするいわゆる修飾機能の表現で、言い換えれば、抽象的表現なのだ。

エヴェレットはこの論文で再帰性は本来認知上の特性で言語学上のものではないと主張した。彼はノーベル賞を受賞した経済学者で認知心理学者、またコンピューター科学の専門家でもあるハーバート・サイモン（Herbert Simon）の1962年に発表され、大きな反響を呼んだ論文「複雑系の構造」<sup>38)</sup>を引用しているが、そのハーバート・サイモンは論文の中で、ある項目を同類の項目の中に埋め込むこと（チョムスキー言語学の核となる再帰性、つまり埋め込み枝分かれ構造であるが）はヒトが情報を構造化する際に自然に用いる手法にすぎない、と主張している。エヴェレットが考えるには「マイクロソフト・ワードのコンピューターソフトはまさにこの枝分かれ構造でできている。1つのフォルダーを開けばそれが2つの別のフォルダーに分かれ、そしてそれぞれがまた次の2つに分かれる。まさに枝分かれ構造そのものだ。サイモンはこの埋め込み入れ子構造こそが人間が情報を組み立てる時に用いる方法の本質で、同じことが人間のすべての知的体系で見られる、と主張している。もしサイモンの説が正しければ、これはごく一般的な認知上の特性と考えられるので、このために特別に言語学的原理があると考えする必要はなくなる」。同じことだが、エヴェレットが好んで使う言い方をすれば、「ある思考内容を他の思考内容の中に入れ込む能力はまさにヒトであることの証だ。だって、我々は他の種よりも頭がいいからね」ということになる。エヴェレットはピーダハンもこの認知上の特性は備えているが、ただ文化上の制約があるため、統語構造上はこの特性を示さないだけだ」と言う<sup>39)</sup>。

学者によっては、ピーダハンには再帰性がないというエヴェレットの主張に対して、これはピーダハンが馬鹿だと言うのと同じだとエヴェレットに批判的である。オランダのマックス・プランク心理言語学研究所<sup>40)</sup>で言語認知グループの座長を務めるネオ・ウォーフ派のステファン・レヴィンソン（Stephen Levinson）<sup>41)</sup>などは、印刷物でエヴェレットを「ピーダハンがまるで半人前の単純な文化の担い手で、頭を使わない人々であるかのように貶めている」と酷評した。オーストラリア国立大学の言語学者アンナ・ヴィエルジュビツカ（Anna Wierzbicka）も同じようにこの論文に当惑して私にこう漏らした。「どういえばいいのかわからないんだけど——私は多分人間の連帯、人権などの観点に立てば、我々人間がすべてまったく同じ認知能力を持っているのかという問題には、多くの人が取って触れようとはしない微妙な問題が関係するのだと知ることが本当はとても大切なことだと思うわ」と。

エヴェレットはこのような批判に戸惑った。というのも彼は論文の中で、ピーダハンが他とは異なる特徴を持っていたとしてもそれは断じて精神的遅滞や欠損などの結果ではない、ときっぱりと述べているからである。ピーダハンの生まれたばかりの幼児をジャングルから外へ移して世界のどこかの町で育てたなら、そこの言葉を何の苦もなく覚えるであろう、と彼は述べている。加えてエヴェレットが指摘していたのは、ピーダハンの人々は、ジャングルの生活で長く生き

延びるのに必要なあらゆる術に生得的な優れた才能を発揮する点である。例えば、彼らは居住地域に生息するあらゆる重要な植物の使い道や在処を心得ているし、地元の動物の行動や、捕獲の方法、あるいは逃げ方に熟知し、さらには、道具や武器など何も持たないで裸でジャングルに入っても、三日後には籠一杯の果物や木の実、小さい鴝鳥を持って帰って来ることができる。「彼らは誰よりも、この地域のどの先住民よりも生存のための術を心得ている。彼らは非常に頭のいい人たちだ。レヴィンソンやヴィエルジュビツカが言うように、彼らにも当然あるはずだと考えられているものが実際に彼らにはないのだと主張しても、それがそのまま彼らを知性のない馬鹿者だと呼ぶのと同じだなどとは、私は一度も思ったことがない」と彼は言った。

この論文に対する反響のうちでエヴェレットにとって最も重要だったのはチョムスキーからの反応であった。この4月に届いたエヴェレットへの電子メールの中でチョムスキーは、ピーダハンに再帰性がないのはチョムスキーの普遍文法理論に対する重大な反例であるとするエヴェレットの主張を否定し、「普遍文法は言語獲得と言語使用の基盤となる遺伝部門についての偽りのない理論である」と書いている。さらに「普遍文法に取って代わる明晰な代替理論など無い」とも書き加えていた。私はチョムスキーに、この論文についてどのように考えるのかインタビューを申し入れたが、彼は断ってきた。その代わり彼のMITでの同僚であるデービッド・ベセツキー（David Pesetsky）、ハーバード大学の言語学者アンドレ・ネヴィン（Andre Nevins）、そしてウニカンピの言語学者セリヌ・ロドリゲス（Cilene Rodrigues）が共著で発表した「ピーダハンの例外性：再検討」の論文を参照するように言った。この論文は先月チョムスキーの生成文法理論に関する論文を集めたウェブサイト *LingBuzz* にも置かれたが<sup>42)</sup>、著者達はエヴェレットの1988年のピーダハン語についての論文と1983年の博士論文にある資料を引き合いに出して、この言語の特異な諸特徴（もちろんこれにはピーダハンには再帰性がないという主張も含まれるが）についてのエヴェレットの最近の主張に異議を唱えた。この著者達はすでにエヴェレットは初期の論文の中でもピーダハン語にはある種の再帰性の構造が欠けていることを指摘していたことを認めている。（80年代の初めにエヴェレットは、例えば英語では、“Tom’s uncle’s car’s windshield…”（「トムの叔父の車のフロントガラス…」）と言う場合にピーダハンには所有を表す表現を別の所有表現の中に埋め込むことをしない、と書いている<sup>43)</sup>。）それにもかかわらず彼らは、エヴェレットの初期の資料には、ピーダハン語には実は埋め込み操作があると思わせる証拠が含まれていると論じている。

この資料が、エヴェレットがチョムスキー理論の信奉者だった25年前に集められたものだという事実は大切な論点ではない、とベセツキーは私宛ての電子メールに書いている。また彼は、いずれにしてもベセツキーや彼の共著者たちはエヴェレットの初期の著作の記述的な部分に「特にチョムスキー言語学的視点」は見取れない、とも記して「当時の論文は、大方が言語事実についての記述とそれを分類、整理したものだ」と付け加えていた<sup>44)</sup>。

エヴェレットは *LingBuzz* にベセツキーや彼との共著者たちへの返答を投稿したが、そこで、チョムスキー理論が彼の言語資料収集や分析に一定の影響を与えたのは必然だと述べている。「理論と無関係な記述の仕事など存在しないものだ。我々は理論の側が我々に投げかける問をあらためて問いかけるだけなんだ」と彼は私に言った。*LingBuzz* に掲示した返答の中でエヴェレットは、批判者の指摘の一つずつ丁寧に意見を述べ、ピーダハンを理解するには彼の当時の仕事

の方が今よりも信頼が置けると言う他の研究者たちからの批判に反論している。「僕だったら逆の場合をもっと心配すると思うよ——つまり研究者が決して自分の見解を変えない場合だとか、以前の分析に誤りを見つけた場合だけど」と書いている。また彼は「普遍文法には代替となる仮説が複数ありうる。珍しいことではないけれど、NRP (Nevins, Pesetsky, Rodrigues) がこの問題にはあたかもこれに替わる仮説はないのだと決めつけた言い方をしているが、これは無知によるのかそれとも意図的に誤解を固持しようとしているかのどちらかだね」と付け加えている。

ライブツィヒにあるマックス・プランク進化人類学研究所で発達／比較心理学学部の学部長をしているマイケル・トマセロ (Michael Tomasello) は、*Current Anthropology* に発表されたエヴェレットの論文に対するコメントの中で、文化は中核となる文法の形を整える、というエヴェレットの結論を支持している。ピーダハンは「異なる事柄についてとにかく（我々よりも）雄弁に話をするので、一つ一つの異なる事項が文法化されることになる」。加えて彼は「普遍文法の考え方はなかなかのものだったし、それが提案された頃はそんなに見込みのないものでもなかったのだが、それ以降に多様な言語について非常に多くの事実が明らかになって、結局1つしかない普遍的なクッキーカッターでは対応できないことがはっきりしたのだ」と述べていた。

ハーバードの認知科学者のスティーブン・ピンカーは1994年にベストセラーになった『言語の本能』<sup>45)</sup>の中でチョムスキー理論のいくつかについて賞賛を込めて説明しているが、私に「チョムスキー言語学のプログラムではかなり奇妙なことがまかり通っている。彼は一種の教祖的存在で、奉信者達は彼の宣言をなんの疑いもなく受け入れ、そして彼も通常科学では当たり前になっている証明という手順を必要だと感じていないのだよ。彼の言うことは、仲間内では適切な検討もされないまま神の宣託として受け入れられる。驚くことには、普遍文法を口にする学者の中には、ニューギニアで話される多少珍しく使い手も少ない言語を調べる場合などでも普遍文法がきちんと機能しているか否かを調べるという、徹底した基礎的な手順を実際には踏んでいなかった研究者もいる」と語っている。

ピンカーは、彼自身の「チョムスキー言語学」に対する疑念は2002年にマルク・ハウザー、ノーム・チョムスキー、テカムセ・フィッチ (Marc Hauser, Noam Chomsky, Tecumseh Fitch) が *Science* に再帰性についての論文<sup>46)</sup>を発表した時に一気に膨らんだと述べている。彼らは、ヒトの言語能力は他の生物と異なり、その言語能力というものを限定的に狭く定義すれば、最終的に再帰性だけになる、と主張した。犬もムクドリもクジラもネズミイルカもチンパンジーもすべて同種間での仲間とのコミュニケーションに聴覚上の音を使用するが、再帰的に使う生物は皆無であり、したがって、無限に異なる意味を持つ複雑な発話を作り出すことはできないことになる。ピンカーは「再帰性は当初から常にチョムスキー理論では重要な概念だった。しかし突然チョムスキーの何度目かの理論修正段階で、言語に普遍的にあるものは唯一再帰性だけだということになってしまった。でもそれは言語にどうしてもなければならないといった必須の普遍性ではなく、いわばことばを次々に生み出すまさに魔法の種とでもいえるものなんだ」と語っている。

2005年の初めに、ピンカーとタフツ大学の言語学教授レイ・ジャッケンドフ (Ray Jackendoff) はハウザー、チョムスキー、フィッチ論文への反論を *Cognition* に発表した<sup>47)</sup>。ピンカーは「レイとの論文で我々は、もし魔法か何かを使ってチンパンジーに再帰能力を注入したとしても、



語をつなげて句にしたり、概念に単語を貼付けたり、何10年も前に起こったことやこれから何10年先に起こったり起こらなかったりするかもしれないことを口にするヒトができることはないし、結局、言語には再帰性以上のものがある、ということを示したかったのだ」と言った。ピンカーとジャッケンドフはエヴェレットの研究に言及した箇所、ピーダハンについて「音韻論、形態論、統語論、そして文」は認められるが再帰性はない言語として例にあげている<sup>48)</sup>。しかしピンカーは間髪を置かずに私に向かって、6,000以上も知られた言語の中で1つの言語に再帰性が欠けているからといってチョムスキーの考えが正しくないと言うには十分ではない、と言った。続けて彼は、「もし5,999の言語には何か共通の仕組みがあることがわかっているのに、誰かがそれを持たない言語を1つ見つけたとしたら、そうだな、ひょっとしたら人類学者だったら『これで言語に普遍性というようなものがないことが証明された。何でもありうるんだ』などと言い出す研究者がいるかもしれない。いやもっと言いそうなことは『その変な言語は一体全体どうなっているのだ？』の類いのことかもしれないな」と言ったものだ。

現代の言語学は一般的に、人類がまず最初にどのようにして言語を獲得したのかという問題についての推測を避けてきた。チョムスキー自身ずっと言語起源の問題に関心がないという態度をとってきたし、ダーウィン流の進化論の説明にも懐疑的であった。チョムスキーは「言語の進化が『自然選択』によるのだと考えても、これには何ら実質的な中身がないし、言語の進化には何か自然科学的な説明が可能だというのが単なる思い込みにすぎないと理解しているうちは100パーセント安全だ」と書いたことがある。加えて、チョムスキーの普遍文法理論の一般的な理解は、言語は脳の中で作られて生じる複雑なシステムであるというもので、実際にはこの仮説のせいで言語がどのように進化してきたのかという研究の進展が阻まれてしまった。「これで進化問題についてはドアがパタンと閉じられてしまった」<sup>49)</sup>とジョージア大学の認知人類学者ブレント・ベルリン（Brent Berlin）は私に語ったものである。「普遍文法は何か不可解で、ちょっと首を傾げたくなるようなやり方で、言語というものを日常的にコミュニケーションのために使っている人々の生活から、まるで錬金術を使って言語を封印してしまったかのように振る舞っている。しかし普遍文法は何も現実の生活とまったく無関係な、何か抽象的で美しく、数学的な記号体系といったものでは決してないのだ」。

ベルリンはピーダハンが統語上の進化の初期に言語がどのようなものであったか垣間見せてくれるのではないかと考えている。ベルリンはエヴェレットの論文について語っている。「ダンの研究が示唆しているのはまさにこの点だ。我々が思いつく中で有望と思えるシナリオは、初期の言語が今のピーダハン語の姿に似たものであることを示唆するシナリオだ」。

II テカムセ・フィッチは背が高く、長く先の尖ったもみあげをたくわえ、いかにも育ちの良さそうな人物で、子どものように何にでも興味津々といった素振りをみせる人物である。彼の珍しい名前は先祖である南北戦争の將軍ウィリアム・テカムセ・シャーマン（William Tecumseh Sherman）に由来していた。フィッチはブラウン大学に通い、そこで博士号を取得した。フィッチは動物のコミュニケーションを専門とする生物学者で、ある時アカシガが下降した喉頭を持つことを発見した。この喉頭の下降という解剖学上の特徴は、以前は人間にしかなく言語を発達させるのに欠かせない特徴と考えられていた。（その後、コアラ、ライオン、トラ、ジャガー、

レパード等も喉頭の位置が下がっていることがわかった。) フィッチはヒトがどのようにして言語を獲得するにいたったのかを熱心に研究するようになり、言語学の分野に目を向けたところ、チョムスキーがほとんどこの問題について興味を示したことがないことを知って驚いた。1999年にフィッチはたまたまケンブリッジのホームレスのための新聞 *Spare Change News*<sup>50)</sup> にチョムスキーへのインタビュー記事がでているのを見つけた。フィッチは「読んでみたら、彼が進化について語った箇所があって、それはそれまでのどの出版物で述べたものよりも突っ込んだ内容になっていて、それがなんとこの *Spare Change News* に載っていたんだから！このインタビュー記事を読んで、彼が以前コメントしていたもので、ずいぶん不可解な言い方をしていたので本意がよく理解できなかった事柄がいくつかあったのだけれど、それを丁寧に説明していて、やっと僕もそういうことだったのかと理解できたんだ」と語った。フィッチはハーバードで言語の進化についてジョイント講義をしていたが、さっそくチョムスキーにその講義を受講している学生を対象に話をしてくれるよう頼んだ。講義の後二人は5,6時間話をした。数週間後チョムスキーはフィッチとハウザーと論文の共同執筆について話をし、ヒトだけが持ち、ホモ・サピエンスが言語を進化させることを可能にした言語の特徴について共同執筆することに同意した。彼らは動物とヒトのコミュニケーションを比較したが、その際どちらも共通して持つ音声化の特徴については考えないことにし、結論として、ヒトの言語を特徴付ける操作はただ一つしかなく、それは再帰性だとの仮説を提案した。この論文を仕上げる過程で、フィッチは次第にチョムスキーの考えに同調するようになり、普遍文法理論の支持を公言するようになった。

フィッチとエヴェレットは7月、ジャングルに向かう二日前にポルト・ペリョで落ち合ったが、暗黙の了解なのか互いにチョムスキーの話を避けている様に思えた。しかし出発の前夜に、ちょうど我々がヴィラ・リカホテルのプールサイドに座っていた時だったが、エヴェレットがある教授2人の名前をあげ「今までに僕が会った中で最も傲慢な3人の中の二人だ」と言った。

「3人目は誰なんだ」とフィッチが尋ねた。

「ノームだよ」とエヴェレットは言った。

「それは違う！」とフィッチは大声を上げた。「科学の中でのチョムスキーの功績を考慮すれば、彼ほど傲慢とはほど遠い人物はいないと断言できる。今まで会った中で最も控えめで、リッパな人物だよ」。

これはエヴェレットにはまったく意外なことだった。彼はきっぱりと「ノーム・チョムスキーは自分のことをアリストテレスだと思ってるんだ！」と断言した。「彼は言語学に一つの途方もなく深い穴を掘ってしまったので、言語学が這い上がってそこから抜け出すにはこれから何10年もかかることだろう！」。

彼らはそれから2時間も言い合いを続けた。しかしその夜別れる時には互いに冷静さを取り戻し、再び打ち解けた状態に戻ることができた。そして二人の間の「わだかまり解消」状態は翌日二人がピーダハン村で会った時も保たれていたもので、結局二人はその翌日の朝から実験を始めることで合意した。

日の出頃になって約20人ほどのピーダハンの人々がエヴェレットの家の外に集まって来た。彼らには実験の被験者として報酬——実際にはタバコや、衣服、マニアク粉、マチューテなどであった、が支払われることになっていた。エヴェレットは「嘘じゃないんだ。本当にそれだ

けを目当てに彼らはここに来るんだ。彼らには我々が何をやっているのかなんてまったく興味はないんだ。彼らは狩猟民族なんだよ。彼らにとって我々は果物がとれる木のようなものさ」と語っていた。

フィッチはエヴェレットと一緒にラップトップコンピューターを携え、ムツとするような暑さの中で小屋を出た。二人はピーダハンに先導され、低い下生えの灌木をかきわけ、エヴェレットのオフィスまで——4フィートばかりの高さの支柱で少し地面から上げて作られた小さな小屋だったが——細い道を歩いた。フィッチはコンピューターを机に置くと、この旅のために5,6週間かけて書いたプログラムを起動した。

フィッチの実験はいわゆるチョムスキー階層と呼ばれるシステムを基に作られていて、文法を記述形式別に分類し、加えて、易しいタイプから複雑なタイプへ順番に並べるようにプログラムされていた。最も簡潔な文法形式の1つをピーダハンが学習できるか試すためにフィッチが作っていたプログラムは、まず文法的に正しい要素列として男性の声で無意味な1音節語（例えば、*mi, doh, ga,* など）を読み聞かせ、続いて女性の声で先とは異なる意味のない1音節語（*lee, la, gee,* など）を聞かせて提示するというものであった。正しい要素列の場合には、コンピューター画面の下方にある動画化された猿の頭部が、一旦短時間消えた後再びコンピューター画面の上方の片角までゆっくり上るようになっていた。対して非文法的な要素列（男性の声による1音節語の後に別の男性が読む音節が一つ続く場合か、あるいは男性の声による1音節語の後に2音節以上の女性による語が続く場合のいずれか）の場合には、猿の頭部がコンピューター画面の上方にある別の角にまで動くことになっていた。フィッチは小型のデジタルビデオカメラをラップトップコンピューターの後ろに設置してピーダハンの目の動きを録画した。フィッチは、被験者が無意識に見る目の方向から、猿の頭部がまだコンピューター画面のいずれかの角まで浮かび上がらない数秒間の遅延時間のうちに、被験者の目の動きから被験者が文法を学習できたかどうかを決めることができると期待した。この実験は、刺激となる実験材料を変えて、あらかじめ大学院生と猿を対象に実施を済ませていて、すべての被験者がこの学習テストに合格していた。フィッチは私にピーダハンも間違いなくこの実験をクリアできるであろうと語った。「私がわざわざここに出かけて来たのは、ピーダハンの人々も私のハーバード大学の学生と何ら変わらない理解度を示すということを確認するためだ。他の人が皆なできたことができないはずはない。彼らもこの基本的な型を正しく理解することだろう。ピーダハンもヒトなのだし、ヒトならできるんだよ」と彼は言った。

フィッチは最初の被験者を呼び入れるように言った。

エヴェレットは小屋から出て、椀形の髪型で極端に固く肥厚した裸足をした背の低い筋肉質の男に声をかけた。男は小屋に入りコンピューターの前に座ったが、とたんにコンピューターがおかしくなった。フィッチはコンピューターを再起動した。しかし再び動かなくなってしまった。

「湿気のせいだ」とエヴェレットは言った。

フィッチはあれこれ試して最終的になんとかコンピューターを動く様にしたが、今度はビデオカメラが動かなくなってしまった。

「へまなチョムスキー学者め。実験の一つもできないのか」とエヴェレットは言った。

そのうちになんとかすべての実験器具が正常に作動するようになり、フィッチは実験を始めた。しかしすぐに、このピーダハンはディスプレイの画面をゆっくり上昇する猿の頭部を見ていだけで、読まれる指示資料にまったく反応していないことがはっきりしてきた。

「被験者は予知行動をとっている様子には見えないな。猿がどこへ移動すると思うのか、指で示すよう頼んでみてくれないか」とフィッチは言った。

「彼らは指差しはしないよ」とエヴェレットは言った。すぐに続けて、彼らには右や左にあたる単語もないんだ。代わりに方向を言うのに絶対方向を表す言葉を使うんだ。例えば、人にどっちの方向に行くのかを言う時、「川の上流方向」とか「下流方向」とか「森の方向」とか「森と反対方向」とか言うんだ<sup>51)</sup>。エヴェレットは被験者の男に画面の猿が上流方向に行くのか下流方向に行くのかを答えるように言った。男は何かをつぶやいた。

「なんて言ったんだ」とフィッチが尋ねた。

「彼は『猿は皆森の方向に行く』と言ったよ」。

フィッチはイライラしてしかめ面をした。「そうか、彼らは推測した方向に視線を向けないのだ。何か他に方向を示せる方法はないのかね」とフィッチは言った。

エヴェレットは再びその被験者の男に猿が上流方向に行くのか下流方向に行くのか答えるように言った。男は何かつぶやいてわかったという意思表示をした。フィッチは実験を再開したが、男は猿が動き出すのをただ待っているだけだった。彼は猿を目で追って、猿が画面の上に来た時に驚嘆して大きな声を出して笑いこけ、猿が上流の方向に行ったのか下流の方向に行ったのかを答えた。

この数分後にフィッチはパニック状態になって、声をつり上げ「もし彼らが再帰性の実験で合格できなくても、それは再帰性が問題なのではない。もうこの件はこれっきりにしなれば。つまり、埋め込みのことだよ。理由は、つまり、もし彼がこれを理解できないということになれば、…」

「これが典型的なピーダハンだよ」エヴェレットは平然と言った。「この経験は彼らにとって初めてだ。彼らは新しいことはやらないんだ」。

「しかし彼らが狩りをしている時には、彼らも目で視覚的に獲物の動きの予測をしたりするはずだ」とフィッチは言った。

「それはそうだ。でも、これは本物の猿ではないよ」とエヴェレットはそっけなく答えた。彼は画面を上下にせわしく動く動画の猿の頭部を指差した。

「クソ!」とフィッチは吐き捨てた。「ジョイスティックさえ持ってきていたらな! ジョイスティックで猿を捕まえることができるのに」。フィッチは少しあたりを歩き回って、そして言った。「信じがたいのは、この実験はアスリン (Aslin)<sup>52)</sup> が赤ちゃんを使ってやった時よりずっと現実に近い実験だということだ」。

「いいかい」とエヴェレットは言った「今認知上問題になっているのは、新しいことをやろうとすると文化が妨害となるという点だよ。彼は認知すべきパターンがあるということすら知らないんだよ」。

エヴェレットは被験者の男を帰し、別のピーダハンに小屋に入るように頼んだ。一人の青年が緑と黄色の2002年ブラジルワールドカップのシャツを着て現れ、コンピューターの前に座っ



た。エヴェレットは彼に猿が上流方向に行くのか下流方向に行くのか答えるように言った。

フィッチは実験を開始した。男は猿の顔が動いて静止するたびにニャッと笑って、あごを突き出して方向を指した。

「残る手としては、そうだな、沢山の子どもを集めて最初に方向を答えたものに棒付きキャンディーをあげるというのはどうだ」とフィッチは言った。

「それだと今度は彼らがやりたがらない競争という要因を持ち込むことになってしまう」とエヴェレットは言った。

コンピューターの調子がよくなかった。結局ソフトウェアに問題があることがわかって、フィッチはコンピューターを机から取り上げ、滞在するのに使っている隣の家まで直しに持って帰ってしまった。

「こんなことはアマゾンでフィールドワークをする場合にはしょっちゅう起こることだ。だからほとんどの研究者はここでフィールドワークをしながらないんだ」とエヴェレットは言った。「だけど今問題になっているのは認知ではなく文化の問題だ」。彼はテーブルの前に座っているピーダハンの青年を指差した。「我々が今同じ部屋に座っているからと言って、同じ時代に生きていることには必ずしもならないのだよ」。

翌朝までにソフトウェアの不都合な点は取り除かれていたが、その他の厄介な問題は依然未解決のままであった。一人の水色のナイロンのランニングシャツを着た被験者が、音節を聞くようにと言う指示を無視して画面の猿の頭部について尋ねた。「あれはゴムの猿か？」「この猿には配偶者がいるのか？」「雄か？」等々。また別の被験者は実験中に居眠りを始めた。（この村人は、昨晚一晩中皆とわいわいがやがや話をしたり大声で笑ったりして、まったく寝ていなかった。時計の時間に従って生活していない民族にとっては、日常茶飯事のように起こることだが）。一方、被験者になんとか実験に集中させようとする努力も、小屋の外に集まって、見えないよう遮蔽された窓を通して中まで聞こえる大きな声で話をする他の村人達に邪魔されて功を奏しなかった。

スティーブ・シェルダン（Steve Sheldon）はピーダハン村に駐在するエヴェレットの前任者で、60年代後半にブレント・バーリン（Brent Berlin）とポール・ケイ（Paul Kay）（カリフォルニア大学バークレー校の人類学者で言語学者）の依頼を受け調査に着手していたが、その時に直面した問題について私に語ってくれたことがある。ちなみにブレント・バーリンとポール・ケイは当時先住民族から色彩語のデータを収集していた。シェルダンはピーダハンが色に対応した色彩語を持っていると考えていた。この点はバーリンとケイの共著 *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*（1969）<sup>53)</sup> でもはっきりと述べられている見解である。ところが、シェルダンは後になるまで彼のデータが信頼できるものではないことに気がつかなかった。シェルダンは村人に一人ずつ会って質問するように助言されていたが、村人は一人ずつ別々になるのをいやがったので、かなわなかった。結局シェルダンのインタビューの際、彼らは立ち聞きし、互いに口裏を合わせて答えていたのだ。「彼らの態度は『聞かれた色がどんな色か我々にはどうでもいい。でも彼が何か聞いたそうなのでとにかく何でも答えてやろう、程度のものだった』と」シェルダンは私に語った。（今ではシェルダンもピーダハンには決まった色彩語がないというエ

ヴェレットの見解と同意見である。)

研究者に対してピーダハンが協力的でないのは一種の自己防衛手段だとシェルダンは言った。「彼らは外部から来た人に、自分達は他の先住民とすることが違うとってはからかわれてきた。それで自分たちの言葉を話さない研究者が来ると、彼らは逆にからかって、まったく役に立たないような情報や時にはまったく誤った情報を提供するのだ」とシェルダンは私に言った。

三日目になってフィッチは、彼の実験がうまくいっていないのはシェルダンが経験した問題とまったく同じことが起っていて、それが障害となっているのだと判断した。それでその朝ベッドシートを窓の簾の上に覆い被せ、村人には小屋から離れているように頼んだ。(その間5,6ヤード先でフィッチの従兄弟ビルがiPodでチャーリー・パーカー(Charlie Parker)の曲をかけて村人を楽しませていた。)即座に実験は良くなった。一人のピーダハンの男性は次に何が起こるのか期待を示す目の動きを見せた。ただ、そうだと正確に断定するのは難しかった。というのは、彼の目は男性の顔特有の特徴である肥大化した瞼の下にあり、彼の視線を判読するのが難しかったからである。そこでフィッチは大きく、黒い虹彩をした若い女性で試すことにした。彼女は数回正しい目の動きを見せたが、ただそれが単なる偶然でないとも言えなかった。「あちこちに視線を向けるし」とエヴェレットはつぶやいた。「左右どちらの方向に視線を向けようとしているのかははっきりしないな」とフィッチが言った。

四日目にフィッチは思いがけない幸運に巡り会ったようだった。その被験者は16歳くらいの少女であった。彼女は集中力もあり、機敏で、もの静かであったが、なにより文法を理解しているように見えた。それで彼女の目は猿の顔が動かない内に画面の正しい角の方に向いた。フィッチは喜んだが、多分内心はホットした気分でもあっただろう。彼がアマゾンに来る前私に、ピーダハンがこの課題をうまくこなせなければ「雪男が大男を発見した」と言うのと変わらないことになるだろう、と私に語っていたからだ。

フィッチはチョムスキー階層の上位レベルである「句構造文法」をこの少女に試してみることに決めた。彼は正しい文法構文として、任意の数の男性音節に対してそれと同数の女性音節が続く構造から構成されるプログラムを用意していた。ハウザー、チョムスキー、フィッチは彼らの2002年の論文で句構造文法は記憶容量とパターン認識に多大な負荷をもたらすが、人間の言語に必要とされる最小限の基盤をなすものであると述べていた。

フィッチは少女にこの文法を教えるため一緒にいくつかの練習ドリルを行った。彼とエヴェレットは後ろに下がってこれを見守った。フィッチは言った。「もしこれがうまくいったらアメリカ国立科学財団に助成金を申請できるだろう。これはすごいことになるかもしれないよ——もちろん心理学にとってもだけど」。

心理学ということばが出てきて(この分野はしばしば環境が行動に与える影響を強調する点で、チョムスキーの自然科学主義とは一線を画するので)エヴェレットは声を上げて笑って言った。「やっとな彼も私と同じような考え方になってきたな!」と。

少女はスクリーンを凝視し、HAL<sup>54)</sup>に似たコンピューター音が意味のない音節に単調な抑揚をつけて流れるのに聞き入った。フィッチはカメラのファインダー画面をじっと見つめ、少女の目の動きで彼女が文法を理解したのかどうかを識別しようとした。判定は不可能だった。たぶんフィッチはその録画フィルムをスコットランドにもって帰らなければならないことにな

るだろう。そうして先入観を持たないポストドクのボランティア研究員がフィルムを精査し、発音された音節のサウンドトラックと映像とを慎重に重ね合わせた映像を時間経過に沿って「採点」すれば、被験者の目が猿の顔の動きを予見していたのか、それとも単に実際に目で追っただけなのか確実な判定ができるだろう。（フィッチは先週このデータについて「期待できそうだ」と言っていたが、それ以上詳しく述べたがらなかったし、結果の公表も決めていないようである）。

その夜エヴェレットはピーダハンの人々を彼の家に招きピーター・ジャクソン（Peter Jackson）が監督したキング・コングのリメイク映画の上映会を催した。（エヴェレットは村人が動物映画が特に好きなのを予め知っていた。）日が落ちて、発電機のガーガーという音が響き始めると、かれこれ30人ほどのピーダハンが集まって来てベンチや、エヴェレットの「インディアンの部屋」と呼ぶ部屋の木の床に腰を下ろした。「インディアンの部屋」は簾の取り払われた家の一角にあり、床につばを吐く性癖を持つピーダハン専用にした部屋である。エヴェレットは予め用意しておいたポップコーンを大きなボールに入れて皆に回した。そしていよいよ映画が始まると、彼はすぐ早送りして、リメイクでフェイ・レイ（Fay Wray）の役を演じるナオミ・ウォッツ（Naomi Watts）が正確には何処だかわからない南洋の島で先住民の生け贄としてキングコングに差し出される場面を映し出した。ピーダハンは大きな声をあげて皆喜んだり、怖がったり、おかしがったり、びっくりしたりしていた。そしていよいよキングコングが大きな音を立ててヤシの木々をなぎ倒しながら登場すると、それこそ大騒ぎになった。小さな子ども達のはじめはスクリーンのそばでおとなしく座っていたが、突然立ち上がり、ちょこちょこ歩きながら、急いだ足取りで母親の膝に倒れ込んだ。大人と言えは大きな笑い声を上げ、スクリーンに向かって叫び声をあげていた。

フィッチの実験では、チョムスキーの普遍文法がピーダハンにも当てはまるのかという問いに最終的な結論を出せないとしても、このジャクソンの映画ははっきりと、ハリウッド映画の文法には普遍性があり、この点なら疑いの余地もないことを証明した。コングが猛禽と戦い、ワッツが巨大昆虫から身を守りながら逃げのを見ながら、ピーダハンは声を出して画面の解説をしていた。エヴェレットの通訳によると、「さあ彼はこれから倒れるぞ!」、「彼はもう疲れているんだ!」、「彼女が走っている!」、「気をつけろ、ムカデだ!」などと口々に叫んでいた。しかも、ピーダハンがゴリラと少女の間でかわされる、長くてだらだら続く表情の描写シーンでも、彼らが互いにどのようなことを伝え合おうとしているのか理解できない素振りをまったく見せなかった。「彼女はゴリラの奥さんだよ」と一人のピーダハンは言った。このような映画へのピーダハンの反応を見てエヴェレットは自分の理論が正しいことを確信した。「彼らは映画の巨大猿がどのような性格なのか一般化しようとはしてはいない。彼らはただスクリーンに映るその時々演技に対して、そのまま目にしていることを言葉にして反応しているだけなんだ」と説明した。

フィッチの実験の最後二日間では結局あの16歳の少女と同じくらい成果のあがりそうな被験者を見つけることはできなかった。しかし彼はこの六日間のジャングル生活で達成できた成果に満足していた。フィッチは、我々がポルト・ベリョに帰ってヴィラ・リカホテルのプールサイドで腰を下ろしている時に私に語った。「私はダンの説は非常におもしろいし、また妥当性のあ

るアプローチであるとも思う。これは従来の知見に新たに加える価値が十分あると思う。言語のような複雑なものは色々違った角度から見る必要があるし、ダンが議論している方向性は非常に面白い。これからさらに一層研究を深める値打ちがあると思う。しかしピーダハンが普遍文法の反証になるかという点になると、ウーンとしか言えないね。あの村で実際目にしたどれをとっても、なんとというか単に問題の組み立て方に問題があったのではないかということに尽きて、それ以外にこの言葉に何か特別なものがあると納得させるようなものはなかったと思う」と。

ブラジルでの最後の夜、私はホテルの薄暗いロビーでケレン・エベレットに会って話をした。ケレンは55歳なのにまったく年齢を感じさせない女性で、大きな黒い目をし、腰まで届く髪を後ろへ垂らした妖精のような女性である。彼女は理論言語学のコースもきちんと受けているが、ピーダハンへの主たる興味は相変わらずキリスト教の伝導にあった。SILの信条を忠実に守り、しつこく布教することもせず、また積極的に彼らを改宗させようともしない。SILの思いは聖書をうまくピーダハン語に訳せればそれで十分だというものである。ケレンはいまだにこの言葉がよくわからないと力を込めて言う。「わたしはまだこの言葉を十分ものにできないでいるの」と告白し、すぐに「でもやっと初めて何かをつかみ始めている気がするの、25年経ってやっとね」と付け加えた。

この言葉を習得する鍵はこの人達の歌いにある、とケレンは言った。つまり、この人たちは子音や母音を発音せずに、ピッチや強勢、リズムといった、いわゆる言語学で「韻律」と呼んでいる要素の変化だけでコミュニケーションをとることができるのである。これを聞いて私はある夜の出来事をふと思い出した。それは村で誰かがこちらが思わず引き込まれそうになるような、何とも言えない旋律を、まず上昇音階で、続いて下降音階で歌っているのを耳にした時のことだ。その声は同じ旋律を半時間以上もまったく変えることなく何度も、何度も繰り返した。私は一軒の小屋の背後までこっそりと音を立てずに忍び足で近づいた。それはひとりの女性が綿の生糸を糸巻きに巻揚げながら、まるで弱音機をつけた角笛のような響きをした、非常に珍しい旋律を、抑揚をつけながら歌っている声だった。彼女の足下にはまだよちよち歩きの幼児が一人で遊んでいた。私はエヴェレットにこの光景について尋ねたことがある。彼の答えは、ここの村人がいかにして「自分たちの夢を歌う」のかという点に集中し、あまり要領を得たものではなかった。しかしケレンに同じ場面の話をすると彼女は生き生きとした声で、これこそピーダハンが子どもに自分たちのことばを教えるやり方なのだと言明してくれた。その幼児は延々と繰り返される歌いを聞いて韻律を自分のものにしようとしていたのだ。これこそひょっとしたらエドワード・サビアが主張した、言語習得は文化理論であるという仮説を裏付ける具体例に当たるのかもしれない。

「ピーダハンの言語は私が知っていることばの中でも一番よく韻律を使うわ」とケレンは私に言った。「これはノートに書き取って、整理して、持ち帰れるようなものではないのよ。実際にその場で見て、聞いて、それを肌で感じなければいけないの。ちょうど誰かが歌を歌う時のようなものよ。実際に歌うところを見ながら歌を聞きたいと思うし、また一緒に歌おうとする、あれよ。だから私もそうし始めたの。そしたら今までに記録したことのないようなもの、テープを聴いた時には一度もそれまでわからなかったものがそこにあることに気づき初めたのよ。



そこには実際に言葉を使うという行為そのものも含まれているのよ。それでその時私は言ったの『テープレコーダーとノートを片付けて。人に集中して、彼らを見るのよ』と。彼らは、その場で聞かなければ決して気づかないような韻律を使ってたくさんのことを伝えているのよ。こんなことは今まで私が知っているどのことばについても報告されたことがなかったわ」とケレンは私に語った。ケレンを長い間当惑させていたピーダハンの本当の姿が明らかになった瞬間だった。そして彼女は言った。「私にはわかったのよ。そう！主語・動詞はああ言う風に見えるのね、節の構成素、時を表す句、そして目的語、等々がどのような感じがするのかが身体で理解できたのよ。それが本当に壁を突き破って新しい世界へ踏み込む始まりになったの。もっとも、まだ完全に壁を破ったなんて言うつもりはないけど。だってまだ動詞句構造を自由に使いこなすこともできないのよ<sup>55)</sup>」。

ケレンが言うには、エヴェレットと彼女が二人でピーダハンの言葉を「またすべて初めからやり直さなければならない」とわかった時、エヴェレットは相当イライラして、そのことで結局2002年に彼はアマゾンを離れ学究生活に戻ることを決心することになったということだ。「彼は努力家だったし、それに言語についての自分の見解や今まで積み上げた実績を無駄にしたいとは思っていたの。結局私たちがあの村で一緒に過ごした最後の年になって——その時の彼はちょうど、『もうこれで終わりだ。オレはここを出る』。あれは丁度私がピーダハンの歌を始めた年で、彼はこう言ったの『クソ、俺は絶対この言葉を歌うようにはならんぞ！』と。そして、彼は出て行ったの。苦痛だったのよ。頭がいいのに理解できないのは苦痛なのよ。それで言ったの『私はかまわないわ。でも私たちは何かを見逃しているわ。私たちは違う角度からもう一度見直さなければいけないのよ』」。ケレンは首を振って言った。「ピーダハンはずっとそこへ調査に出かけていったあらゆる言語学者の理解を拒み続けてきたの。なぜなら分節素の分析から始めて順次次のレベルへ進むというアプローチができない言葉だからよ。それでは何も見つからないわ。実際には分節素でできた音節を使かわなくてもコミュニケーションが可能な言語だからよ」。

その日の数時間後エヴェレットが私をボルト・ベリヨの空港まで送ってくれた時に、彼にケレンと話をしたことを明かした。彼はため息をついた。「ケレンは驚くほど進歩した。今なら彼女の方が私よりも韻律的、唄い発話については詳しいことは確かだ。たぶんいくつかの分野では彼女の方がピーダハンの言語事実について私よりもよく理解していると思う。でも、すべてが韻律の問題というわけではないんだ。そこが重要なのだ」と彼はもらした。ケレンのピーダハンに対する見方は伝道師としての使命感からきているんだ。「我々にピーダハン語が完全にかかるようになるとは彼女にはとても信じられないのだよ。なぜならそうなら聖書にある神の言葉が嘘になってしまうからね」と彼は言った。

エヴェレットは空港の駐車場に車を入れた。ケレンについて話すのが彼にはかなり苦痛であることははっきりしていた。彼も我々の最後の会話が彼女のことで喧嘩になってしまうのは嫌だと思っていた。しかしその時ふと思いついたのは彼が意見の食い違いで腹を立てている相手は実はチョムスキーだということだ<sup>56)</sup>。

「多くの人のチョムスキー観はジャングルの中で先導役をしてくれる人というものだ」とエヴェレットはピーダハンの村で私に語ったことがある。「もし帰り道をちゃんと探し当てそうな

人がいるとすれば、それはチョムスキーなのだ。だからみんなできるだけ離れず彼の後をくっついて行きたがる。ただし中にはこう言う人もいるんだよ。『何がチョムスキーだ、勝手にしろ。オレは川に出てカヌーで行く』と。

### 訳者あとがき

この John Colapinto によるレポートは、心理学者の Tecumseh Fitch が D. Everett の案内でアマゾン流域に住むピーダハン村を訪れ、その文化と言語を調査した際の同行記事である。ピーダハンの文化と言語については今日まで人類学を始めいくつかの領域で活発な議論が行われているが、言語学上の議論は特に Hauser, Chomsky, & Fitch (2002) (以下 HCF) 以来、普遍文法 UG (特に「狭義の言語能力」Faculty of language in a narrow sense, 以下 FLN) をめぐり議論の応酬が続いている。このピーダハン語にかかわる UG (特に FLN) の再帰性問題は今や *Language* といった権威ある学会誌 (Linguistics Society of America) にも掲載される言語学上の問題にとどまらず、論争がかなり感情的で、互いの中傷戦といえるところにまで発展していて、これも一因となってピーダハン語や文化、またその紹介者 Everett について新聞や雑誌インターネット、テレビのドキュメンタリー番組などでも取り上げられることとなっている。この論争の様子は“messy academic battle”などとも形容され、「“brutal,” “spiteful,” “ridiculous,” “childish” といったかなり露骨なことが飛び交う、言語学者による議論とは思えないような中傷合戦」(“Rise and Fall of a Venomous Dispute,” March 28, 2012 by Geoffrey Pullum, *Chronicle of Higher Education*, <http://chronicle.com/> November 29, 2013,) と言われるほどになっている。しかしながら今次の戦いは、変形成文法理論の「成長期」でもある 1960-70 年代にかけて繰り広げられた、統語部門 (句構造部門) の始原表示としての「深層構造」を主張するチョムスキー派対意味を中心とした「深層構造」を主張する G. Lakoff, McCawley 等を中心とする生成意味論派との「言語学戦争」(Linguistic Wars) と呼ばれた論争を思い起こさせ、一見雰囲気は似ているものの、当時の論争が経験的事実の説明力という点を焦点とした理論的な枠組み論争であり、非常に多くの経験的事実が明らかになったことを考えると、今次の再帰性に関する論争は実質的な議論がしにくく、感情論に傾倒しがちで、この点かなり性格を異にするとと言える。

ピーダハン語には Chomsky や Fitch などの主張する再帰性がないし、また再帰性は必ずしも言語に必要なという Everett の主張や、UG に代わる “Ethnogrammar” を提唱する根拠となっているのがピーダハンの言語と文化がそれまで他の言語では報告されていないユニークな特徴をいくつか合わせ持つという点である。このユニークな特徴については本レポートでも様々なエピソードとともに紹介されているが、そのいくつかをまとめておくと次のようになる (この特徴の多くは他のアマゾン流域の言語・文化にも共通する): 1) 親族組織が極端に単純である、2) 色彩語がない、3) 数や数え方がない、4) 完了時制がない、5) 創世についての神話がない、6) 歴史や空想神話がない、7) ブラジル人と 300 年以上にわたる接触があるにもかかわらず単一言語を保持している、8) 再帰性がない。このような事実を統一的に説明するのに Everett は「直接経験の原理」(IEP) というものを提案している。これはピーダハンの文化についての仮説であるが Everett はこれが文法にも反映されていると考えている。この IEP が言語の文法自体の仕

組みに与える影響は、いわゆる状態動詞（英語の know, be sorry(S), be proud(S)、など）や叙実動詞（英語の regret(S), be aware(S), realize(S)、など）がこの言語の語彙には欠損している事実や、二つ以上の修飾語や所有を表す句を複数用いることができないこと、さらに関係詞構文、等位・逆接的複文、などが観察できないといった特徴として現れている。理論的にはこの制約は動詞の語彙が持つ述語の項についての情報、制約として現れると説明される。つまり意味関係によって述語に直接許可される項は主要部、核のみを持てる、という制約である。この制約によれば、所有表現や補文構造は（主要）述語が直接支配しない項を含むのでピーダハン語では不適格な構造と判断される。いずれにせよ、具体的には前提や推論を含んだ句や文はこのレポートでも Everett の説明として紹介されているように、すべて言語学的な意味での「再帰性」という特性に含まれる特徴といえる。従って、Chomsky などが主張するヒトの種としての生得的言語能力 UG の再帰性は論理推論等に関わる人間の一般的な能力で、必ずしも UG の特性と考える必要はないという結論になる。

この再帰性問題については二つの大きな論争があるといえる。一つは HCF に真っ向から反論した Pinker and Jackendoff (2005) とそれに対する Fitch, Hauser, & Chomsky (2005) のコメントを巡る議論。もう一つの流れは、John Colapinto のレポートにもある Nevins, Pesetsky, & Rodrigues (NPR) と Everett の間のピーダハン語に特化した再帰性有無の論争である。前者の議論はピーダハン語も若干引き合いに出されるものの、ほとんどは一般的な UG (FLB と FLN) に関わる議論で（もちろん UG の進化論的な解釈や他の認知能力との比較、他の動物のコミュニケーションとの比較等も含まれるが）ピーダハン語については真っ向からの議論を意識的に避けているような印象を受ける。引き合いに出されるのはいわゆる「道工具箱」説である。つまり、再帰性は UG の道具立ての一つであるが、必ずしもすべての言語に使われる必要はない。従って、ピーダハン語に再帰性がないからといってそれが UG にないという証明にはならない、というものである。これについては Everett は「必ずしも使われなくてもいい道具といっても、UG の道工具箱には再帰性しかないではないか」と反論するが、いずれにせよ一般的に因果関係があることの証明はできないので、どのような経験的な根拠でより説得的な議論が進展し、言語、UG の理解がより深まるような議論が期待される。例えば、Fitch (2010) で展開されている議論では、実際に納得できる人は少ないであろう。そこでは Everett の再帰性についての見解を次のような理由で支持できないと述べている：1) ピーダハンの人々は単一言語話者でしかも言語学には素人であるので現時点ではピーダハン語についての母語話者としての資料に欠ける、2) ピーダハン語については非母語話者であるが、非常に堪能で、しかも言語学の訓練を受けた人物が二人、つまり、Everett と彼の元妻であるが、がいるが彼らの間でも再帰性や他のいくつかの点に関して見解が分かれている、3) 彼の以前の論文では再帰性にあたる埋め込み構造がピーダハン語にあることが示され、これが彼の最近の再帰性欠如仮説の反論となる資料である、等である。従って彼の結論としては、ピーダハン語に堪能な言語学者が他に出て Everett の主張を支持しない限り彼の説は説得力を持たない、というもので、かなり主観的な根拠によっている。

一方、NPR の Everett に対する反論は、Everett が IEP が文法体系を決定した結果再帰性に関係する構文を持たないと主張する根拠としてあげているピーダハン語の資料を一つ一つ検証し、反論するといった、具体的なレベルでの論争となっている。それにも関わらず反論に次ぐ反論

と容易に決着をみないことから、やはり出発点は言語イデオロギーに帰着する論争であることを伺わせる。

いずれにせよ、従来普遍文法とはいうものの、あまりにも英語等限られた言語を対象とした分析から導かれた内容であるし（このこと自体に問題はないにしても）、また生物言語学では比較対象がしばしばヒト以外の動物のコミュニケーション方法であることを考慮すれば、ピーダハン語のように非常に「例外的」な言語を敵視する理由はまったく見つからない。

このような状況のもと、2010年に *The Evolution of Human Language: Biological Perspectives* という論文集が発行されているが、これは HCF の 2002 年の論文をイントロダクションに収め、そこで提起された基本的な問題について “Language architecture” (Part I) , “Language and interface systems” (Part II) , “Biological and neurological foundation” (Part III) , “Anthropological context” (Part IV) という構成で、進化論的生物言語学をその名が示すように学際的な領域から議論している。しかしながら、R. Jackendoff や D. Bickerton の論文は含まれるものの Everett の論文が掲載されていないのは、現在の言語学戦争をある意味で象徴しているように思える。いずれにせよ、ジャングルをさまよう Chomsky 派を尻目に、水路にボートを漕ぎ出した Everett であるが、言語学者（あるいは人類学者等）としてはどちらにつくか、あるいは飛行機を駆り出して両者の行方を上から傍観するのか、選択を迫られるところである。

## 注

- 1) ジョン・カラピント (John Colapinto) は 2006 年から雑誌『ニューヨーカー』の専任執筆者で、代表作としてはベストセラーノンフィクション『ブレンダと呼ばれた少年——ジョンズ・ホプキンス病院で何が起きたのか』（村井智之訳、無名舎）(*As Nature Made Him: The Boy Who Was Raised as a Girl*, 2000) や、英語で発表された小説を対象とする最大の国際文学賞である国際 IMPAC ダブリン文学賞にノミネートされた『著者略歴』（横山啓明訳、早川書房）(*About the Author*, 2001) などがある。
- 2) 原題は “*The Interpreter*.” *The New Yorker* (April 16, 2007) に掲載された。その後 *The Best American Science and Nature Writing 2008* (Edited and with an Introduction by Jerome Groopman, Houghton Mifflin Company: Boston・New York) に収録された。この翻訳は著者からの許諾を得て掲載している。
- 29) “Numerical Cognition without Words: Evidence from Amazonia.” *Science* 306: 496–499, 2004.
- 30) エヴェレットは 2008 年に *Cognition* に数についての実験結果を共同発表している (Frank, Michael, D. Everett, E. Fedorenko, and E. Gibson, “Number as a Cognitive Technology: Evidence from Pirahã Language and Cognition,” in *Cognition* 108: 819–824, 2008.)。確な数を表す数詞は言語的な普遍性ではなく文化的経験の産物であるが、言葉としての数詞が認知上の数え能力に影響を与えることはなく、また数詞は時間や空間相などの基軸を決める認知上の手法であるという内容。
- 31) 注 29 と同じ。
- 32) この「抽象的な考えができない」という表現がしばしば議論になる。エヴェレットの論文ではしばしばピーダハンの精霊や精霊との交信が話題にされる。これはまさしく抽象的な世界が対象となっているのではないかと批判がなされるが、エヴェレットは精霊はピーダハンにとっては架空の創造物ではなくあくまで現実に体験できる「現実」であり、丁度彼らにとって「夢」も日常と何ら変わらないものとして経験できるもので、それ故物語としてしばしば語られるのと同じであると説明している。
- 33) 原文では *xibipítio* と綴られているが、エヴェレットの他の文献では *xibipítio* と記されるので、それを採用する。
- 34) 逆に川向こうから現れた場合も同じ「イビピーオ」という言い方をする。つまりこの「イビピーオ」



- という語は誰か（または何か）について、それが現れたり消えたりするという個別の事象を言い表すことではなく、現象自体が経験の圏内に入ってきたか否かという、いわば認識の方法自体を意味することばである。直接経験なのかどうかの境界で、言語化できるか否かの基準ともなる。
- 35) 直接体験の原理で抽象的なことが話されないといってもピーダハン語が抽象的な概念をすべて欠いているというわけではもちろんない。単語自体記号という既に抽象化の産物であるからだ。直接体験の原理という文化的な縛りが統語上の構文として、直接経験（と彼らが文化的に考える）事柄の組み合わせのみが許され、再帰性という特性に帰される様々な統語上の構文がこの言語でみあたらないというだけである。
- 36) よく知られている様に英語と日本語では埋め込み型の樹形図のタイプが異なる。例にあげられているような構文では、英語では右枝分かれになるが日本語では中央に枝分かれがどんどん埋め込まれる。
- 37) Infinite use of finite means
- 38) "The Architecture of Complexity." *Proceedings of the American Philosophical Society*, Vol. 106.6, pp. 467-482, 1962.
- 39) 再帰性はヒトの持つ創造性を保証するものであると考えられるが、エヴェレットの主張は文法上再帰性の仕組みを持たなくても、つまり構造上無限に長い文が生成できなくて理論上生成できる文の数が有限であっても、言語そのものが有限であるということにはならないというものである。ピーダハンの語る物語も複雑な話が多いし、話は限りなく長くなる可能性がある。言語の「無限性」はなにも文法レベルで実現しなければならないという必然性はないというのが主たる論点である。再帰性は脳の知性、認知能力の一過程と考えれば文法的特性から再帰性を排除しても創造性を損わずに済む。
- 40) Max Planck Institute for Psycholinguistics in Netherlands.
- 41) P. Brown との共著 *Politeness: Universals in Language Usage* (1978) の著者としても有名であるが、1990 年以降は認知の問題、特に普遍性と言語相対論に関連する著作を多く発表している。ここで言及されている発言は John Gumperz との共著 "Rethinking Linguistic Relativity." *Current Anthropology* 32-5, pp. 613-623, 1991, でのもの。
- 42) この論文は後に雑誌 *Language* に掲載された。David Pesetsky, Andre Nevins, Gilene Rodrigues, "Pirahã Exceptionality: A Reassessment." *Language* (2009) 85.2, pp. 355-404.
- 43) ピーダハン語では特定の句の中では所有格や修飾語は一つに限られ、複数重なることはない。そのような場合には文末に、独立して付加する形式を取る。例えば "Tom's uncle's car was broken." であればピーダハン語では "Uncle's car was broken, Tom's uncle." に類した構文になる。このような後置構文も再帰性であるとする研究者もいて、一つの争点でもある。所有格表現が再帰性を持つのは、例えば "uncle" という名詞は "Tom's uncle" という別の名詞句に埋め込まれているし、この名詞句自体より大きな "Tom's uncle's car" の一部になっていて、可能性として無限性を持つからである。
- 44) エヴェレットが 2005 年の論文で彼の博士論文のピーダハンの資料は不正確なところがあったと述べたことに対して、博士論文はチョムスキー理論に基づいての分析であったので他の言語と普遍性を共有する普遍文法の存在が前提になっていたが、2005 年の論文ではその普遍性の否定が主旨となっていたので、結論にあわせて資料を提示しているのではないかと批判を受けた。それに対してペセツキーらはどちらの資料を検討してもピーダハンが他の言語と特に違うという結論は得られないし、特に再帰性を否定する反証も見つからない点を指摘した。博士論文で特にチョムスキー理論に基づいて分析が可能であったのはピーダハンが他の言語と特に変わらないからできたのだとも述べている。
- 45) *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: Harper Perennial Modern Classics, 1994.
- 46) "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?" *Science* (2002) 22.Vol.298-5598, pp. 1569-1579. この論文は当初掲載誌が許容する長さよりかなり長かったため、内容を大幅に削った縮小版である。そのためこの論文の批判やコメントには著者達が意図しなかった誤解や解釈の誤りが

多く、2005年に再度同じテーマで論文が書かれた。なおこの論文につけられていた *Appendix: The Minimalist Program* は別にネット上で公開されている。

- 47) “The Faculty of Language: What’s Special about It?” *Cognition* 95, pp. 201-236, 2005.
- 48) PJ 論文の原文では “However, Pirahã very clearly has phonology, morphology, syntax, and sentences, and is undoubtedly a human language, qualitatively different from anything found in animals. (p.216) となっているが, “sentences” は “semantics” の誤りか。
- 49) ベルリンとの言語の普遍性解明を旗印にてチョムスキーが提唱した生成文法研究は, 「生物言語学」(Biolinguistics) という新領域で生物学者, 脳神経学者, 心理学者などと学際的な協力体制を組み, 1974年にアリゾナ大学の認知科学者で言語の進化を研究している Massimo Piattelli-Palmarini によって学会が開催され, 実質再スタートをきることになり, 長年言語学では禁じられていた起源論, 進化論の研究が加速的に進むこととなった (Chomsky 2010:45)。HCF 等の論文も, この学際的な研究を進めるための土俵作りという趣旨。
- 50) 1992年マサチューセッツのケンブリッジで始まったストリート新聞で, ホームレス撲滅や支援を目指す非営利団体によって発行されている。
- 51) 身体を基準に相対的に方向を決める方法は「エンドセントリック・オリエンテーション」(endocentric orientation) と呼ばれるのに対して, ピーダハンなどの絶対的指標による方向指示法は「エクソセントリック・オリエンテーション」(exocentric orientation) と呼ばれ, それほどまれではない。
- 52) Richard N. Aslin. 認知科学者で現在ニューヨークのロチェスター大学の教授。特に子どもがどのようにして知識を獲得していくかを語の認知過程などの実験を通して研究している。句や文などから個別の語を認知するようになる際「統計確率情報」を使用するとの仮説を提案し, 幼児やチンパンジーなどを対象に実験を行っている。
- 53) Berkeley: University California Press.
- 54) HAL (Heuristically programmed ALgorithmic computer) は, 『2001年宇宙の旅』(A. C. クラーク原作, キューブリック監督によって1968年に公開された映画 2001: A Space Odyssey) に登場する宇宙船 *Discovery One* で乗組員と交信した人工頭脳。
- 55) ピーダハン語の基本語順は S-V-O であるが, 動詞には最大16種類の接尾辞が付くことができ, その順序や共起の制約もあるが, 単純計算では動詞の形は65,000は下らないと考えられている。
- 56) ウェブ上の *Edge* (www.edge.org) というサイトに *The Reality Club* という掲示板があり, ピンカー, エヴェレット, ベセツキーなどが再帰性と思の関係について議論を展開している (“Recursion and Human Thought: Why the Pirahã Don’t Have Numbers” A Talk with Daniel L. Everett. 2007年6-7月)。そこでピンカーは「エベレットの見解は反普遍文法でもなく, またけんか相手はチョムスキーでもない。彼の主張は逆に言語の非普遍性, つまり変異についてのものであり, 論争上のけんか相手は非チョムスキー派の言語学者を含む99%の言語学者であろう」と述べている。それに対してエヴェレットは「ピンカーの意見は正しい。今や言語本能や普遍文法概念にとどまらず言語学の対象自体が問われている。特に文化と文法との関係を考え直す必要があるからだ」と答えている。

## 参考文献

- Berlin, B. and Kay, P. (1999) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.
- Chomsky, N. (2000) *On Nature and Language*. New York: Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (2010) “Some Simple Evo Devo Theses: How True Might They Be for Language?” In Larson, R. K., Déprez V. and Yamakido H. (eds.) 2010, 45-62.
- Everett, D. (2008) *Don’t Sleep, There Are Snakes: Life and Language in the Amazonian Jungle*. New

- York: Vintage Books (屋代通子訳『ピダハン』みすず書房, 2012).
- Everett, D. (2010) "Cultural Constraints on Grammar and Cognition in Pirahã." *Current Anthropology* 46 (4): 621-646.
- Everett, D. (2012) *Language: The Cultural Tool*. New York: Pantheon Books.
- Everett, D. (2013) *Recursion and Human Thought: Why the Pirahã Don't Have Numbers*. (Edge: [http://www.edge.org/3rd\\_culture/everett07/everett07\\_index.html](http://www.edge.org/3rd_culture/everett07/everett07_index.html)).
- Fitch W. T. (2010) "Three Meanings of 'Recursion': Key Distinctions for Biolinguists." In Larson, R. K., Déprez V. and Yamakido H. (eds.) 2010, 73-90.
- Fitch, W. T., Hauser, M. D. and Chomsky, N. (2005) "The Evolution of the Language Faculty: Clarifications and Implications." *Cognition* 97, 179-210.
- Hauser, M. D. (2010) "On Obfuscation, Obscurantism, and Opacity: Evolving Conceptions of the Faculty of Language." In Larson, R. K., Déprez V. and Yamakido H. (eds.) 2010, 91-99.
- Hauser, M. D., Chomsky, N. and Fitch, W. T. (2002) "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Does It Evolve?" *Science* 298, 1569-1579.
- Jackendoff, R. and Pinker, S. (2005) "What's Special about It? The Nature of the Language Faculty and Its Implications for Evolution of Language." (Reply to Fitch, Hauser, and Chomsky) *Cognition* 97 (2005) 211-225.
- Joos, M. (ed.) (1957) *Readings in Linguistics: The Development of Descriptive Linguistics in America since 1925*. American Council of Learned Societies.
- Larson, R. K., Déprez V. and Yamakido H. (2010) *The Evolution of Human Language: Biological Perspectives*. Cambridge University Press.
- Pinker, S. (1994) *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: Morrow (椋田直子訳『言語を生み出す本能 (上) (下)』NHK出版, 1995).
- Pinker, S. and Jackendoff, R. (2005). "The Faculty of Language: What's Special about It?" *Cognition* 95, 201-236.
- Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Hare Press Publishing, (2010) (泉井久之助訳『言語：ことばの研究』紀伊国屋書店, 1972/ 安藤貞雄訳『言語—ことばの研究序説』岩波文庫, 1998).

